



2019年7月発行  
著者 木村翼沙  
tsubasa@tsubasa-shodo.com

本教材、および収録されているコンテンツは、著作権、知的財産権によって保護されていることはもちろんですが、購入・ダウンロードされたコンテンツは、あなた自身のために役立てる用途に限定して提供しています。教材に含まれているコンテンツを、その一部でも、書面による許可（ライセンス）なく複製、改変するなどして、またあらゆるデータ蓄積手段により複製し、オークションやインターネット上だけでなく、転売、転載、配布等、いかなる手段においても、一般に提供することを禁止します。



翼沙書道教室会報誌

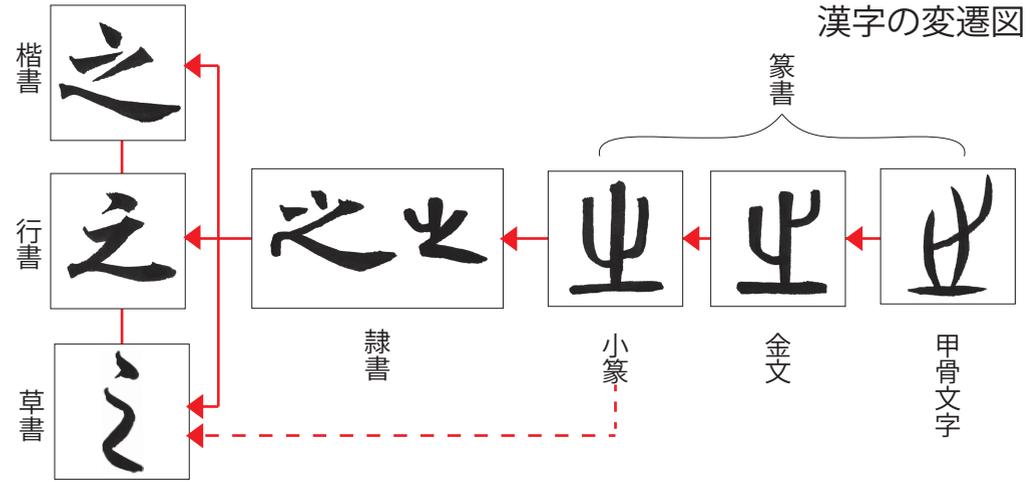
# NO.2

©Calligrapher Tsubasa Kimura

表紙は中国広西省桂林の七星公園内の桂海碑林  
(中国四大碑林のひとつ) 龍隱洞摩崖石刻より  
\*南北朝時代から、近代まで合わせて200以上の  
の石刻が壁一面に刻まれている。

©Calligrapher Tsubasa Kimura

# 漢字の変遷図



## 漢字の書体について

漢字は約三千年前に、中国で生まれ、今日まで書体の変遷を繰り返しながら、受け継がれてきました。現在、私たちが日常的に使う漢字は、どのように成立していったのでしょうか。漢字の書体（文字のスタイル）の変遷を見てみましょう。

漢字には、篆書・隸書・楷書・行書・草書の五書体があり、それぞれに様々な書風の名品が伝えられています。

【篆書】漢字の五書体の中で最も古い書体。（隸書に移行する前の書体の総称）  
 【甲骨文】文字としての体系を持つ最古の漢字。亀の甲や牛の骨などに刻された占いの記録。

【金文】殷周時代の青銅器に施された文字。（鐘鼎（しょうてい）文ともいう）  
 【小篆】秦の始皇帝が制定したとされる篆書の標準的な字体。（秦篆ともいう）

（\*篆書は、これ以外に「大篆」と呼ばれる書体がありますが、これは戦国時代以前の書体の総称で、甲骨文字以外の周の金文や石鼓文などがこれにあたります。）  
 【隸書】篆書の点画が直線化され、簡略化されて生まれた書体。

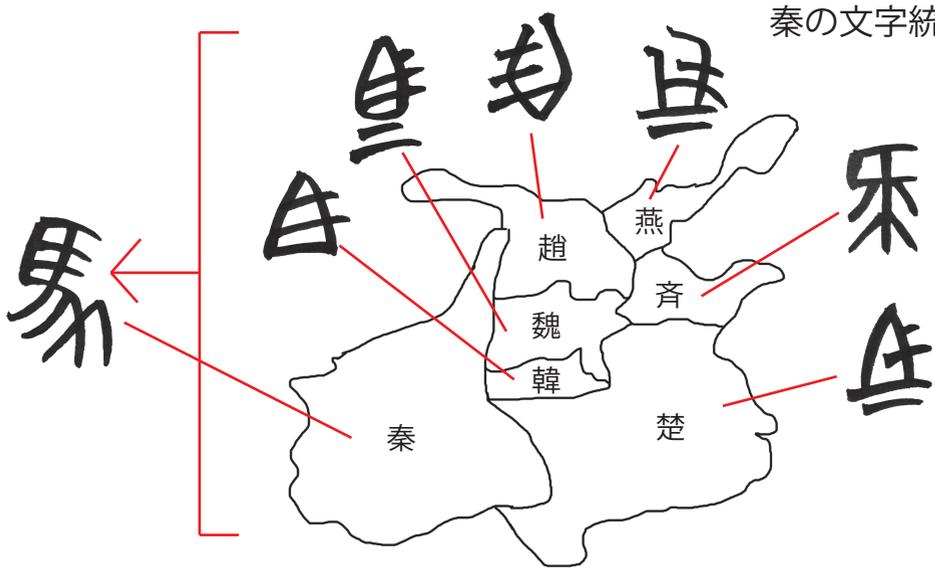
【草書】隸書が速書きされ、簡略化されて生まれた書体。

【行書】隸書が速書きされ、簡略化されて生まれた書体で、王羲之によって芸術の域に高められたといわれる。

【楷書】隸書から生まれた書体で、漢字の五書体の中で最も最後に完成した。

（\*よく、楷書の速書きが行書、行書の速書きが草書と思われるがちですが、実際は楷書が最後に完成した書体です。）

# 秦の文字統一



## 始皇帝の文字統一（小篆）について

中国を初めて統一した秦の始皇帝（B.C.259-B.C.210）（姓は嬴（えい）名は政）秦の荘襄王の子で、十三歳で王位に就き、二二歳の時「冠礼（成人の儀式）」を行い、自ら政務を執りました。当時の古代中国は、群雄割拠、戦乱の世で、七つの強国（齊・楚・燕・韓・趙・魏・秦）がひしめき、互いに熾烈な争いを繰り返していました。その中で、諸国を次々と滅ぼし、紀元前二二一年、ついに天下を統一しました。その際、全国を統治するのに便利なよう、文字（小篆）の統一も行いました。上図は、戦国七雄各国の「馬」の字形と、統一文字として採用された秦の「馬」の字形です。（現在では、新たな竹簡等の発見により、秦の統一文字を小篆に限定することが見直されています。）

始皇帝は統一後に全国を五回にわたって巡行しました。その際、七箇所に自らの頭影碑を立てたと言われます。

現存するのは、瑯邪台（ろうやだい）刻石と泰山刻石の残石だけとなっています。泰山刻石は、前二一九年、始皇帝が泰山に登った際に、建立され李斯の書とされています。現在、中国山東省の岱廟に置かれ、ただ十数字が残るのみとなっています。



中国山東省・岱廟



泰山刻石（現在は、ガラスケースに入っています）



「馬」拡大部分

## 「拓本」について

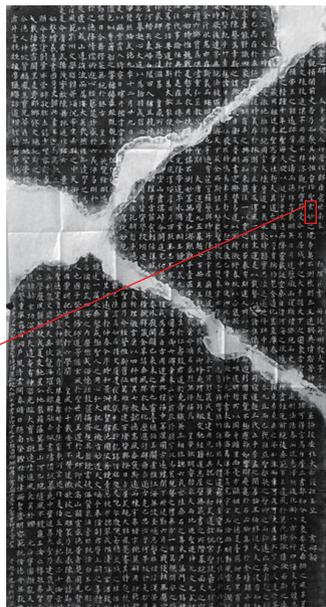
書道の学習は、歴代の名筆古典の臨書が中心となりますが、唐代までは、碑に刻されたものが大半です。そこで私たちが臨書をする際には、必ず、碑に刻まれた文字を紙に写し取った「拓本」に触れることとなります。しかし、よく、白黒の拓本を見て、「碑から直接写し取るのに、なぜ文字が反転していないのか」と質問されることがあります。（木版印刷では、版が反転されて作られているから不思議に感じるようです。）

そこで、今回は、「拓本」について学習しましょう。

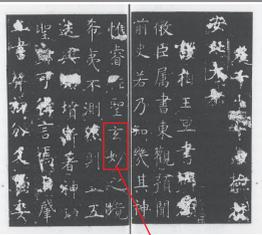
### 「拓本」とは

書の古典には、紙、布、木、竹などに書かれた真蹟（肉筆）のほか、石や木に刻されたり、金属に鋳込まれたものがあります。これらを手本や鑑賞の為に、紙に写し取ったものを拓本といいます。また、碑などの全体を拓本に採ったものを全拓または全榻（ぜんとう）といい、それを一行ごとに切って、装丁したものを剪装本（せんそうぼん）といいます。

\*お稽古では、原本を見て臨書するようにとお伝えしていますが、例えば、半紙臨書するために用意された、同等サイズの肉筆のお手本を見て書き写しては、拡大肉筆手本のあるものしか書けない、ということが起こります。書道（臨書学習）を続けるためには、手本となる古典が必要となり、それらの多くは、拓本法帖の形態であり、これに臨んで書き写す力を身につける必要があるからです。



「孔子廟堂碑（こうしきやうどうひ）」の全榻本



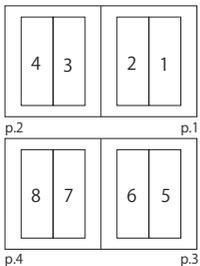
「孔子廟堂碑（こうしきやうどうひ）」の剪装本（法帖）

**玄妙**

初級「一」①楷書の第一回で学習する「玄妙」は、この中のたった二文字です。（もつと虞世南を学びたい人は全部臨書をおすすめします）

21	17	13	9	5	1
22	18	14	10	6	2
23	19	15	11	7	3
24	20	16	12	8	4

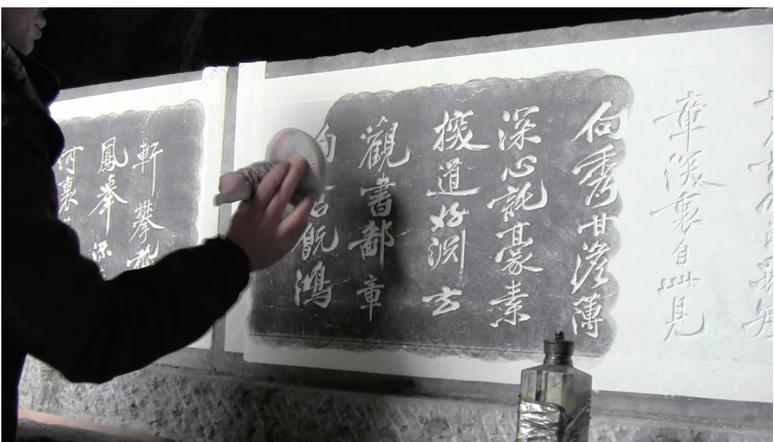
全榻本



法帖

全榻本は、碑の全体の雰囲気をもよく表していますが、大きなものは鑑賞や手本にするのに不向きです。そこで、冊子（法帖）の形にすることが行われてきました。しかし、元の雰囲気異なるので学習の際は、注意が必要です。

拓本には、湿拓と乾拓がありますが、ほとんどは湿拓で、その方法は、画仙紙や綿紙を被写物の上にのせ、水を刷いて密着させ、半ば乾いてから、上から墨汁を湿したタンポで叩きます。コピーや写真技術がなかった時代の複写技術の一種で、資料の保存、書道を学ぶための手本として活用されてきました。しかし、一枚一枚が手作業で作られ、それぞれ趣が異なることから、拓本自体を鑑賞する風潮も生まれました。



採拓風景Ⅱ表紙の「桂海碑林」より

タンポを使ってリズミカルに何度も墨をのせていきます。

\*出来立ての拓本の裏側。石に刻まれた凹部分が、はつきりと残り立体的です。

## 初級コースの流れ・その②行書

「初級コース①漢字・楷書」を終了された方は、漢字の行書を学習します。行書では、書道史上、最も重要な古典である、王羲之(おうぎし)の「蘭亭序」と空海(くうかい)の「風信帖」を臨書します。

### 初級コース②漢字・行書の説明

#### ■行書の特徴

行書は、一字中の線が繋がったり、省略されたりします。その表現は、楷書に近いものから、草書に近いものまで幅広くあります。それぞれの特徴を味わいながら、行書の筆使いや造形をしつかり身につけて下さい。

#### ■各古典の特徴

王羲之(おうぎし) 307?-365) 「蘭亭序(神龍半印本)

・王羲之は長い書道史上で最も重要な人物です。筆で文字を書くことの自然な美しさを味わいましょう。

空海(くうかい) 774-835) 「風信帖(ふうしんじょう)」(第一通)

・空海は日本でも能書家として知られていますが、日本書道史上で最も漢字をよくした重要な人物です。

人名・王羲之(おうぎし) 307?-365)

作品名・「蘭亭序(神龍半印本)」

(らんでいじょ・しんりゆうはんいんぼん)

王羲之が、永和九年に蘭亭で開かれた「曲水の宴」について書いた序文の草稿(下書き)。

全体は、二八行で三三四文字書かれ、書道史上の最高傑作と言われている。

ポイント

文字を書く時の筆の自然な動きを意識して臨書しましょう。

人名・空海(くうかい) 774-835)

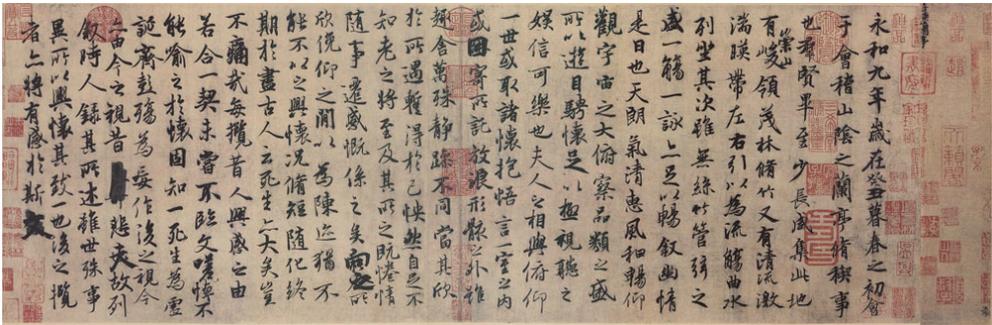
作品名・「風信帖(ふうしんじょう)」(第一通)

空海が最澄に宛てた手紙(全部で三通)。全体は一五行で二三文字書かれ、日本の名筆中第一と言われている。

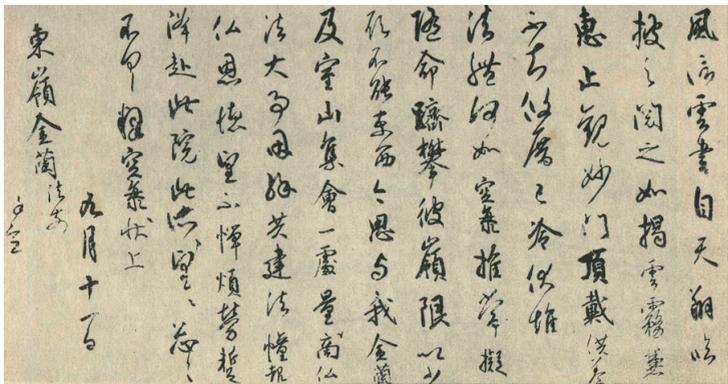
ポイント

線の太細の変化を意識して臨書しましょう。

\*半紙に四文字もしくは、六文字ずつ臨書します。基本的に課題通りに進めて頂きますが、ご自身で最後までほとんど練習する事をおすすめします。



「蘭亭序(神龍半印本)」



「風信帖」

\*王羲之の真筆は現存せず「神龍半印本」は唐代の馮承素(ふうじょうそ)の模本と伝えられている。

臨書例



永和九年



歳在癸丑



暮春之初